

## 5月14日（土）

おはようございます。

いつも同じような話をしますけれども、人に親切にする利他の気持ちをもつという事は大切なことです。

さて、ナチスドイツによるユダヤ人迫害が行われようとしていたとき、やがて殺されるだろうユダヤ人をたくさん救ったと言え、リトアニアの日本領事館に勤めていた杉原千畝の話があります。逃げ惑う多くのユダヤ人たちに、滞在が許されるぎりぎりまでビザを発給し 6000 人にのぼる避難民を救い、のちに「命のビザ」呼ばれ讃えられました。その記録などの資料が世界教育遺産に登録されることになりそうだと聞きました。

その後、ユダヤ人の大虐殺が行われたアウシュビッツの収容所で助かった人の中に、ビクトール・E・フランクルという人がいます。収容所での体験をもとに、『夜と霧』という本を書いた人です。諸君の中にも知っている人がいるでしょう。

フランクルも助かった最初は、良かったと思っていましたが、やがて助かった人たちの話をたくさん聞いているうちに、助かった人たちには共通項があることに気づいた。それは、たとえば、年老いた母を残しているから自分は死ぬわけにはいかないと、強い思いを抱いている人であったり、小さい子どもたちを残して自分は死ぬわけにはいかないと考えた人であったり、あるいは、自分がいなくなったら、組織がだめになるから、ここでは死ねないと思った人たちばかりだった。つまり、単に自分が助かりたいと思う人たちではなくて、誰かのために、あるいは皆のために自分は生き残らなくてはならないと考えた人たちが命を救われたというのです。

そういう意味で利他の気持ちというのはすごいなと思うのです。NHKのある番組をこの前見ていましたら、景気が悪く税収が思わしくないの、ある地域に、公的老人ホームと障害者施設をくっつけた複合施設が作られた。そこに一人の男性がいて、この人は交通事故で脳に障害があり、ちょっとしたことで、すぐに怒り出してしまいう人だった。一度不愉快なことがあると、三日でも四日でも怒っている。家族も初めは交通事故だから仕方ないと考えていたけれども、彼と一緒に生活していると、しんどくて仕方ない。お医者さんに行ってもぜんぜん治らない。とうとう手を挙げてしまった。その後やむを得ず障害者施設に預けた。

この男性が、施設に入ったらその施設は老人ホームと一緒にになっていた。彼はもともとエンジニアだった。老人ホームの人たちは機械の使い方がぜんぜんわからないから、その男性にいちいち聞く。

彼は面倒臭がらずにその方法をいちいち教えてあげる。老人たちは何遍聞いても忘れてしまうから、毎日何遍でも聞く。毎日教えているうちに、その男性の腹を立てて怒ってしまう病気が治った。医者はなぜ治ったのかわからない。機械の使い方がわからず困っている老人たちにそれを教えて、親切にしているうちに治ったのです。医療的にはなぜ治ったのかはわからない。

利他の気持ちは医療とは関係ないと思いがちですが、この男性のように、じつは自利にきちんとつながっているのです。利他の気持ちを持つことこそが実は大きな自利につながっていることをよくわかっておかななくてはならない。他の多くの人のお役に立とうという気持ち持つだけでも、必ず自利につながるのです。こういった利他の気持ちや親切心には、「不思議な不思議な効果」があります。

また、以前ダライラマ法王は親切にされる側にも効果があるとおっしゃっていました。傷ついたモルモットが二匹いる。一匹は仲間といっしょにおり、もう一匹は一匹だけにしておく。仲間と一緒にいる方は、仲間が傷を舐めてくれるそうです。唾液に傷を急速に治す力はないそうですが、傷口を舐めてもらうだけで、治り方がまったく速いそうです。モルモットでさえ、仲間が親切にしてくれることで、自分の免疫力が活性化するのです。

そうすると、利他の気持ちは相手にとってもいいことになるのです。そして、自分の不思議な生命力といった自利にもつながっていく。自利利他の精神というのはほんとうにみんなを幸せにする精神です。

諸君は毎日毎日、勉強やクラブのことで、考えがさまざまに取り紛れてしまうかもしれませんが、自利利他の基本(福の神のコース)を忘れずに生活していただきたいと思います。今朝の話はこれで終わります。

学校長